

第9回生涯学習センター運営協議会

〔日 時〕2012年12月16日（日）13:00～16:00

〔場 所〕生涯学習センター 視聴覚室

〔出席者〕※敬称略

委員：石川 清（会長）、岩本 陽児、押村 宙枝、川島 演、黒田 純子、佐合 昭浩、
菅谷 万里子、竹葉 かほる、富川 尚子、中村 香、並木 修、西原 要四郎、
柳沼 恵一
以上 13名

事務局：熊田センター長、小林課長補佐、外川統括係長、丸山主事（記録）

〔欠席者〕小川 久江、辰巳 厚子

〔傍聴人〕1人

〔資 料〕・第9回生涯学習センター運営協議会レジュメ

- ・2012年度生涯学習センター事業企画書兼事業評価シート資料1～8
- ・センター長報告
- ・2013年度まちだ市民大学HATS事業プログラム開発指針
- ・まちだ市民大学HATSプログラム委員選任要項
- ・町田市生涯学習ボランティアバンク事業実施要綱

<協議事項>

1. 2013年度市民大学事業について

事務局：市民大学プログラム委員の組織は会議が主体の組織であったが、今年度からプログラム委員を専門的委員に近い委員として任命し、プログラムを作成する。12月14日の定例教育委員会で委嘱をして、本日から国際学のプログラム委員会が始まる。来年度は、人員や講座名等の問題を変えていき、職員もそういう形で対応する。福祉講座については、今年度に5回のプレ講座を行い、そのアンケートの結果を入れながら来年度の参考にしていきたい。福祉講座は、募集人員が1コース7名程度で、全3コースで20名程度になる。直結してボランティアに結びつくような講座としてやっていた。人数のキャパを増やすことも含めて考えていきたい。環境講座や人間関係学は同じテーマですと実施してきたので、改革することも検討していただく方向で進める。

（意見・質問）

会 長：2014年度の市民大学事業に向けて、生涯学習センター運営協議会で来年の秋までに考えていく。今回はそれぞれのプログラムに対するご意見をお願いしたい。
プログラム委員に対する謝礼はどうなるのか。

事務局：謝礼は今までと同じように、1回の会議につきいくらかという形になる。委員の任命については、今までは会議要綱があり、そこに委員を招集して会議を実施するという形態だったが、今回から個々の委員を委嘱して、その委員の集まりがプログラム会議という位置づけになる。

会 長：プログラム委員の会議のニュアンスが変わったようには受け取れない。どこの文章でそのことが分かるのか。

事務局：従前は、まちだ市民大学HATSプログラム会議要綱があったが、それがなくなった。条例の中にまちだ市民大学HATS事業実施要綱が新たに作られ、第4項において教育委員会でまちだ市民大学HATSプログラム委員を委嘱すると定められ、そこしかない。今回は委員を専門的委員に近い委員として委嘱するので、委嘱の要件を整えるために内規で選任要項を新たに作った。会議自体のものはなにもない。

委 員：有識者と修了生の違いは何か。それによって報酬金額が違うのか。また、多摩丘陵の自然入門講座は委員が9人で、健康学講座は委員が3人しかいないが、その違いは何か。

- 事務局：学識の方は大学教授の方を含んでいる。その方々と、市民大学の修了生であり、修了後もその分野で団体を作って活動されている市民の方である。報酬は有識者も修了生も変わらない。委員の人数については、今までと同様に10名以下としている。自然入門講座は、各フィールドでどういふことをやるのかをプログラムに組み込んでいることもあり、各フィールドの代表者がプログラム委員になっているので、人数が一番多い。健康学講座は、2010年までは元氣学として実施してきたが、座学を中心にしたプログラムに組み直した。そのときに法政大学のスポーツ健康学の方を紹介していただき、この3名を選任したという経緯がある。本来であれば、一般市民の方にもプログラム会議に入ってほしいが、昨年の後期から始まった講座であり、今の段階で市民を入れるのは、修了生がいないということと、講座自体の方向性を変えていく可能性もあるので難しい。講座の様々な事情により、人数が異なる。
- 委員：修了生と有識者を分けなくてもいいのではないかなと思う。経緯は分かるが、何名以上という目標がないから少ない人数でよしとせずに、何名以上という目標はあったほうがいいと思う。また、大学の先生だけではなく、市民も入れていくという方向性を示していくほうがいいと思う。
- 会長：今の問題も含めて、大きな問題としては、やはり生涯学習センターとなったところで、ことぶき大学や市民大学はそのまま独立した性格の中で実施していくのか、それとも生涯学習センターとして大きな方針の中で組み替えるのか、ということも考えていくべきと思う。
- 事務局：市民大学のプログラムは職員が作るのではなく、外部の方の意見を聞きながら作っていくという目的があって、その方々をプログラム委員として委嘱している。今回、選任要項を作成したのは、委員を選任するにあたって何も基準がないということで作成した。どういった方が委員になるかを考えたときに、当然有識者の方、それから、市民大学を受講し、その後もグループを立ち上げて活動されている方、そういう方々に入っていただきたいということでやっている。その他に一般の方でプログラムに関わっていきたい方にも参加してもらい、様々な意見を出していただくことはいいと思うので、その辺りはこれから検討していく。
- 会長：今から再来年度に向けて議論をしていかないと、今と同じことになってしまうのが怖いので、次年度の始め頃から議論していくべきと思っている。選出区分は町田市で委員を選出するときには昔から必ずある。この選出方法や肩書きは、それに従ったということか。
- 委員：同じ金額ならば分ける必要もない気がする。
- 事務局：選任要項の第3項に学識経験を有するもの、専門性を認めるものという項目がある。選任した人はどういう人なのかを示す必要がある。一般の方を公募することも考えられるが、今までそういう形をしたことがない。様々な人が関わると短期間にプログラムを組むのが難しい。今回も前期については、2月中頃までに内容を決めないと募集に間に合わない。委員の委嘱期間は1年、来年11月までとした。今までは、任命してからその翌年の3月までに前期・後期を含め、全てのプログラムを作らないといけなかった。ある程度慣れた方々で作っていかないと間に合わないところがあって、それがずっと続いていた。今後はその辺も改善していきたい。何かいい方法があればご意見をいただきたい。
- 委員：任期が12月からであると短期間でやらなければいけないというのが既に分かっているならば、任命の時期をもう少し余裕のある時期にずらせばいいのではないかな。もっと早い時期に任命すれば、より内容を練れるし、気持ちのある一般の方にも入っていただく余裕ができると思う。
- 事務局：スタッフの問題もある。その年度の講座が12月で終了する。その間、スタッフは講座の準備や資料作成、講師への連絡等さまざまな業務があり、4月から12月の期間が終わって、やっと次の仕事ができるようになる。プログラム会議が始まると、講師の交渉も含めて全てをやることになる。業務の兼ね合いが難しいところがある。任命の期日についても、教育委員会にかけて委嘱するので、日程的な調整も含めて考えていくことになる。
- 委員：本当の意味での新しい体制はいつを目指しているのか、そのためのプロセスが見えない。同じ状況がいつまでも続いて、結局はあまり変わらない状態が続くおそれがあるので、何年に新しい体制にして、そのためにはどういう手順で改革するのか、必要な条例や要綱をそれぞれ作っていく、ということを示していただきたい。特に外部の意見を取り入れて要綱を作成していくならば、もう少し広い視野で委員を選ばないと、例えば市民公募を取り入れてもいいと思うが、それは第三の中に含まれているのか。

- 事務局：含まれていない。それは敢えて含めなかった。公募をするとなると、プログラムが完成せず、業務自体ができなくなってしまう。
- 委員：全員が公募ということではなく、1人、2人でも入れることによって広がりが出てくるし、新しいものを取り入れる姿勢も出てくると思う。まとまるために多少の時間がかかったとしても、結果としていいものができるればいいのであって、勇気を持って取り入れることを考えていただければと思う。
- 事務局：13年度のプログラム委員については、11月に教育長まで決裁をあげている。それを12月の教育委員会で報告をさせていただいた。14年度を目指して、どういう形で市民大学のプログラムを作っていくのかを議論していきたい。13年9月までにある程度の形を決め、14年度に具現化していきたいと思う。今年度については始まっているので、大幅な見直しは難しいと思うが、何か意見があれば担当からプログラム委員へ伝えたいと思う。
- 会長：プログラム委員の問題だけではなく、市民大学、ことぶき大学、公民館事業それぞれがどうあるべきかを含めて、2014年度に全てのものがスタートできるような方向で考えていきたいと思う。
- 委員：プログラム委員自身が動きやすい方法、どうして欲しいと考えているかといったモニタリングをやっていただきたいと思う。
- 会長：当然、生涯学習センター運営協議会の中でも議論していく。プログラム委員側の意見もピックアップしていただければと思う。
- 委員：陶芸講座だけが異質な感じがする。陶芸を外してしまうと、芸術及び文芸がなくなってしまうと思うが、今まで「陶芸があって油絵がないのはどうして」と誰にも聞かれずにきたのが不思議に思う。HATSのA（芸術及び文芸）はどうするのかという問題があると思うが、例えば、町づくりや町中のモニュメント等であるとか、いかに住みやすい町であるとか、映画の撮影を招くなどの文化活動である等がここに入っていると雰囲気として合うと思う。陶芸となると、何故限定的なものが入るのかという気がする。2014年度に向けて大きく改革をするのであれば、考えたほうがいいと思う。
- 委員：陶芸は利用効率が悪く、費用がかかる。上からの払い下げで、陶芸スタジオの面倒を見なければいけない状況になっていると思うが、もしそうだとしたら、そこで利益を生む方法もあると感じる。利益を生む方法というのは、担当職員が1人いるだけでよく、運営方法を今のやり方から変えること、そういう検討をしていただきたい。2014年度を目標に、様々な改革をしていきたい、それに私たちが提案できることもあると思う。そこで学んでいる人たちの声をどうやって吸い上げていくかという方法も生まれてくるであろうし、運営だけではなく、生涯学習センターをもっと賑やかにしていく、利用効率を上げていくということも大きな課題であろうと思う。面倒をみるスタッフの役割はきついと思うが、逆にそれを軽くする方法があるということは今のところわかっている。取り入れていただけるかは別として、そういう方法も可能であろうと考えている。
- 事務局：陶芸スタジオの窯が耐用年数に来ており、いつ壊れるか分からない状況がある。窯を更新することは不可能なので、窯が壊れてしまうと陶芸スタジオ自体が機能しなくなる。議会において、陶芸スタジオを一般開放できないかという質問があった。窯が更新できないので一般開放には様々なハードルがあること、更新ができれば一般開放の道もあるが、今のままならばやり方を変えることはできないことを話した。ただ、陶芸を市民大学でやる講座であるのかは別の問題である。その辺りを協議していければと思う。
- 委員：陶芸講座が自然消滅するのは別として、もしも自然消滅した場合、A（芸術及び文芸）の部分が手薄になると思う。A（芸術及び文芸）をどう維持するのかということ进行讨论する委員を入れておかないとそこが手薄になると思う。
- 会長：HATSという言葉を存続させるのかということも考えることである。
- 事務局：陶芸スタジオを指定管理にするということも考え、1社に見積もりをお願いした。陶芸スタジオは立地条件が悪く、市の職員でもほとんどが知らないような場所にある。市民の方はほとんど知らないのではないかと。指定管理とした場合、見積もりでは市の持ちだしは900万円ほどかかると出ている。陶芸だけではなく、2階を使って陶芸に類することをすることも考えてあ

ったが、このくらいはかかってしまう。陶芸講座は9回講座であるが、受講してもすぐできるかということそうではない。10年続けてある程度の形になる。ロクロも講座は5回だけしかやらないので、体験講座と銘うって実施している。そんな状況であることはお伝えさせていただく。

2. 「生涯学習センター」の愛称について

(意見・質問)

委員：背景がよく分からない。どなたが発案したのか、どういう目的・狙いがあるのか。

事務局：昨年6月に町田市全体で第2回事業仕分けが行われた。その中で当時の公民館が事業仕分けの対象となり、仕分け人から公民館という名称が古くさいのではないかと、若い世代からも注目してもらえそうな愛称は考えないのか、今までそういう取り組みがあったのか、という話があった。翌年の4月に生涯学習センターになるというのが決まっていたので、その場では生涯学習センターの中で考えたいという回答をしていた。生涯学習センターに愛称をつけるのであれば、こういう場で議論いただきたいと思い、提案させていただいた。

委員：センター長の判断で提案したということですか。

事務局：指摘があった中で、市としてどういう対応をしているのか追跡調査がある。前回は、今後生涯学習センター運営協議会に諮りながら決めていくという回答をした。どう決着したのかが問われるので、この場で議論いただければと思っている。

委員：事業仕分けの検討結果の報告という意味合いもあるということか。若い人にもいいイメージを与えられるようにとの目的があるが、必ずしも若い人達だけではないと思う。

事務局：公民館という名称が高齢者の方が使っていて、若い方から見ると非常に古めかしいのではないかという意見だった。

委員：生涯学習センターが開設したばかりであるので、その名前を浸透させることが重要ではないか。ただ、みんなが受け入れられる何かをつけたいということであれば、企業や組織でスローガンというのがある。例えば、「お口の恋人〇〇製菓」、「こころも満タンに〇〇石油」等、一言で団体の活動を言い表せられるキャッチフレーズを考えて、イベントの際にそれを枕詞にして使っていくのもいいと思う。本当に伝えたいのは生涯学習センターの仕事であるし、そこは何を目指しているのかを一言で分かってもらえる、そういうイメージのもとに考えるならば、何か一言で表せるようなものと考えていくことはいいのではないか。

委員：児童センターには愛称がついている。子ども達が投票して決めているので、自分たちが名前をつけた自分たちの館だという感覚があると思う。生涯学習センターは機能である。どんな名前がいいかを問かけることそのものが広報になるのではないか。ここで決めて、こういう名前になりましたというのでは、生涯学習センターの名前が広がっていかないのと同じように意味がないので、名称をつけることを広報として考えるならば有りだと思う。そのときに一緒にマークを決めてもいいと思う。世の中にはそういうものに応募することが好きな人もいたので、広報として考えるならばいいと思う。

委員：都心の生涯学習センターの中には、生涯学習センターを創ったときに愛称も一緒に募集をしたものもある。応募した方の8割程度が女性だった。やはり女性のアイデアはいいと思う。

会長：愛称については、どこでどのように決定していくのか。

事務局：早急にどうこうという話ではない。愛称をつけるとなると、次はどう進めていくかという段階的な話しになると思う。

委員：子どもセンターや文学館はオープンの際に名称をつけているので、市民にも受け入れられ定着していると思うが、ここは既にスタートしている。周年的なときにイベントの企画でやったほうが、みなさんにお知らせをしたほうがいいと思う。1年経たない段階で私たちが話をして決めるよりはみんなに親しまれるし、市民へ周知する機会になると思う。

委員：公民館という言葉が古くさいと思う人と思わない人がいると思うが、公民館の公民という言葉調べて見ると、中学校の教科書に公民というのがあって、それ以外ではあまり使われていない。そういう意味では古くさいのかもしれないが、一方では、公民館と生涯学習センターと

いう名称が両方出ているので、外からみると一体どちらなのかというのがある。そのような観点から時間をかけて考えるのが望ましく、現段階では愛称という類の呼称はなくてもいいと思う。

委員：この建物につける愛称なのか、機能につける名前なのかでだいぶ違う。その辺を考えていかないとややこしくなる。

委員：生涯学習センターという言葉は非常にいいと思う。生涯学習センターがあちこちにあるという意味では、早急に愛称をつけなくても、生涯学習センターが周知、徹底された名前になりつつあると思う。生涯学習という言葉は、好意を持たれる言葉ではないかと思う。

委員：生涯学習センターという言葉は残して、生涯学習センター〇〇というように、口馴染みのいい言葉にすると、かわいい音や言いやすい音でここがイメージしてもらえるようになって感じた。

会長：まずは生涯学習センターの周知を徹底して、少し時間をおいてから、愛称は事業につけるのかという議論をしながら、次の切り札として愛称をつけるということではいかがか。

委員：あまりひっぱり過ぎないほうがいい。

委員：公募のように、広く意見を求める手順が必要だと思う。

3. 2012年度の生涯学習センター事業の企画について

(1) 資料1 中学生を持つ保護者のための講座「思春期の悩みについて」説明。

(意見・質問)

委員：どういった時間帯か。

事務局：午前中の予定である。折衝の中で決めたい。保護者の方が参加しやすい時間帯を設定したい。

委員：2回とも参加しなくてはいけないのか。

事務局：原則は両方とも参加していただきたい。

委員：2回とも参加すれば子どもと向き合う方法が学べると思うが、1回だけだと状況を教わるだけで終わってしまう。

委員：この事業名でこの内容であると、思っていたものと違うと思う方がかなりいるのではないかと感じた。切羽詰まって悩んでいる保護者の方は直接教育センターへ相談に行くと思うが、そろそろ心配だなと思って来られた方に教育センターのあらましを説明されてもしかたがないと思う。2月15日は私立高校の受験日であるので、進路のことにも触れるといいと思う。

委員：昨年度も中学校を通じてお知らせのプリントを配布しているが、子どもから親の元へプリントが届くことは難しい。学校へお願いしてチラシを配布しただけでは保護者の所へ情報は行かない。必要としている保護者は当然いる。現在、中学校では登録をして、メール配信をしている。それは使えないのか。

委員：それぞれの学校で運用規程を作成しているが、外部からの依頼を受けて、メールを配信することは想定されていない。PTAや学校からの連絡が主となる。中学校であればPTA連合会という組織があるので、そこへチラシやポスターを持っていけば、学校からのルートだけではなく、PTA組織を通してのルートができると思う。

委員：今回の講座は2回講座であるが、事情により2回目は出られないという、学習欲求をそこでできてしまうのはあまり良くないと思う。講座をビデオに撮って、それを出られなかった方に対して貸し出しできるように門戸を広げる努力をしたらどうか。

委員：貸し出しではなく、生涯学習センターにブースを設けて講座のビデオを見られるようにしたらハードルが下がるのではないか。

委員：回数を1回にして、もう少し人数を増やして、内容をコンパクトにまとめられればたくさんの方が来られるのではないかと思う。小学校の頃から働きに出ている保護者が多いので、金曜日の午前中は果たしてどうなのかという気がする。

事務局：本来は4回講座だったのを、2回講座を2回に分けて実施する。講座として簡潔する、段階を経てトータルで学ぶのが講座であると思うので、講演会とは違う、様々な切り口を分けて講座として行う。様々な事情があると思うので、定員に満たなければ片方だけでも参加を認めるとしたいが、やはり両方とも参加できる方を優先せざるを得ない。

会長：講座と講演の定義はそうであるが、講演というやり方も考えられないかというのはある。講演会が導入になって、講座に引き込めるようなしかけがあってもいいと思う。生涯学習センター

を考えたときに、導入と展開というのを頭に入れないと伸びていかない。これからはあるべき姿として考えていただきたい。

委員：全ての家庭教育学級に持ち込む必要はないと思う。コンスタントにえられる世代の、乳幼児を持つ保護者のための講座は従来どおりの回数で実施したほうが良いと思う。回数が多いと参加するのが難しいという方が対象の場合は、そういう手法を使う等、講座によって考えたほうが良いと思う。

会長：講座というやり方もいいが、導入として、講演というやり方があっていいのではないか。

事務局：思春期の子ども問題はここに書いてあるものだけでなく、たくさんある。その中でここにスポットをあてて、主題を絞り込んで短くする努力をした。

委員：この講座をどうにかしてほしいということではなく、中学生の保護者の方みんなが興味を持つ大きな講演会をして、ここで興味を持ったらこういう講座もあるということを宣伝でき、その世代の親と繋がりができるような方法を考えていければいいと思う。直に保護者の方々と繋がる方法を考えたほうが良いと思う。

委員：1回目に足を運んでくれた方が良かったと思うかが疑問に思う。講座を受けて意味があったと思って帰っていただかないと次に繋がらないし、自分だったらがっかりして帰るだろうと思う。お母さん達の心に響く、実際に役に立つような展開をしたほうが良い。

(2) 資料2 まちコレについて説明。

(意見・質問)

委員：このファッションショーについては賛否両論があった。他の大学も加わって拡大イベントにするということだが、そのイメージについて伺いたい。例えば、大学祭の一貫の流れとしてここを使用するなど、そのような大胆な発想ができないわけではない。さがまちコンソーシアムとの連携もあるので、その辺はどうなるのかが気になる。

事務局：前年度はデザイン専門学校だけであったので、特定の学校と連携をしていると指摘があった。今回はなるべく多くの大学と連携したい。相模女子大学はさがまちコンソーシアムから紹介をいただいた。桜美林大学は日頃から生涯学習センターと連携している。玉川大学にも声をかけたが大学の都合があって今回は参加できない。この事業を秋に開催すると、大学祭や版画美術館で行っているファッションショーと重複してしまうので、時期的には2月しかできない。できれば様々な大学を集め、109とも連携しながら実施したいと思っている。

(3) 資料3 時事問題講演会「iPSの未来」について説明。

(意見・質問)

委員：iPS細胞はみなさんに注目されているので、ある程度の知識水準はあると思う。期待できる効果の表現を別の表現にしたほうが良いと思う。例えば、「再生医療について、将来の理解をするためのステップになる」というような指標はどうか。また、事業コストはどういう計算か。

事務局：事業コストは講師謝礼、職員の関わった時間の人件費、会場使用料の合計を募集人員で除したものだ。最終的には、参加者の延べ人数で除すことになる。

委員：当初の予定では、前半・後半にわけて2人の方にお話しいただく予定だったのか。

事務局：当初も1人の方にお話ししていただく予定だった。

会長：「iPSの未来」という題名はこちらで作ったのか。最初にお話しした講師に断られたときに、題名は変更しなかったのか。堂前先生にやっていただくのであれば、もっとふさわしい題名があると思う。

委員：講演の内容にふさわしいタイトルをこれから考えていくということか。

事務局：打合せの中で決めていく。当初の依頼した講師の方であっても、題名は変わる可能性があった。内容も一般の方がさらっと聞ける、きっかけづくりとなる話しになると思う。

委員：iPSに期待をしている人が多いと思うが、その反面、様々な副作用も当然ある。リスク面も含め両方についてお話しできるのは堂前先生が合っていると思う。タイトルもそれに相応しいものをつけられたらいいと思う。

(2) 資料4 まちだの達人に学ぶについて説明。

(意見・質問)

会 長：これは以前から実施しているのか。

事務局：している。町田の人材活用、特にシルバー人材の活用という事業からきている。今回は題材に料理を選んだ。

会 長：通しで使う事業名と、今回の題名が入ればいいと思う。

事務局：題材に合わせた題名をつける予定である。

委 員：仲間づくりが目標になっているが、案外ニーズがあると思う。この講座に参加した方が継続してやりたいといったときの受け皿はあるのか。

事務局：今のところはない。

会 長：これからやるときには、講座後の支援をしていく体制を作りながらやっていくといいと思う。

事務局：センターの事業は、講座を受けた後は自分でという状態になっているので、今後は仕組み作りができればいいと思う。ボランティアバンクに結びつけられる、仲間になった方みんなで活動できるようなものができればと思う。生涯学習センターの中にも調理室を使って活動している団体もある。そういった団体を紹介したり、相談にのったりすることはできる。

委 員：むしろ、そういう団体を積極的に講師の中に取り込んでいくとスムーズにできるのではないかな。自然発生的な流れになっていくと思う。

4. 事業評価について

事務局：評価シートの生涯学習センター運営協議会意見欄について、今は事務局側で議事録からピックアップして、そのままの意見を載せている。生涯学習センター運営協議会でまとめた意見ではなく、個々のバラバラの意見を載せた形になっている。今後は、出た意見を委員の方にまとめて載せていただければと思う。

会 長：評価シート毎に責任編集をそれぞれでやっていただきたい。今回は4シートであるので、順番に押村委員、柳沼委員、岩本委員、中村委員に集約をお願いしたい。

(1) 資料5 防災講演会「大震災に備え 今 何をすべきか」について説明。

(意見・質問)

会 長：防災委員の方が半数以上になるが、講演会の情報を特別に流したのか。

事務局：防災安全課が各自治会の防災を担当しているので、防災安全課に情報を流した。そこから自治会へ情報がいったので、半数近くが委員の方になった。

会 長：そうではない割合はどのくらいか。どのくらいの年代層でこういった方がきているのか。

事務局：年齢的には高年齢の方。自治会の方々も年代が高い方が多かった。

会 長：その辺は狙いどおりか。

事務局：もっと一般の方を入れたかった。一般の方への魅力が薄れてしまった。市民企画講座でも防災関係の講座をしたが、大地震がいつ起こるか分からないので、危機感を持っていると思われる。高まりはあるので、事業の必要性はA評価とした。

委 員：事業内容の評価理由欄では、広報を見て参加した方と自治会の声かけで参加した方が半々だったとあるのに、担当者所見の改善点欄では、参加者のほとんどが自治会の関係者であったとあるので矛盾を感じた。これはどちらなのか。いずれのルートにしても、これだけの方が関心を持っていただけたというのはすばらしいことだと感じた。

事務局：確認し、訂正する。

委 員：応募者数127名、受講者数は130名となっているがどういうことか。

事務局：捉える時点の問題である。締め切りの時点で応募者数が確定したときは127名であった。当日に3名の方が飛び入り参加をした。

事務局：定員に満たないときは、当日の参加もできることを周知している。それを見て参加する場合がある。

委 員：人の繋がりの中でお互いに助け合っていくような講座というのを考えていく必要があると思

う。来年に企画する際は、自助も大事だけれども、共助に結びつけていければいいと思う。

委員：発展性がB評価になっているが酷ではないか。評価の理由から推測すると、既に備蓄済みであって、防災レベルの高い人たちが集まったのでそのような結果になったと思う。そもそも、自治会の防災を考えている人ではなく、家に備蓄がないような人にも声をかけていくにはどうしたらいいか、体力があつてそれなりに判断力があり、地元意識がまだ薄れてはいない世代を防災にどうやって取り込んでいくか、大きな荷物を運んだりするときに高校生を動員できるとすごく効率がいいと思う。今後、高校生に考えてもらう講座ができるといいと思う。集中的に高校生に呼びかけるという手もありではないか。そういう方面を狙った講座ができるといいと思う。

委員：今年度から、高校生は防災の宿泊訓練というのが義務づけられた。金曜日に宿泊をして、非常食を食べて教室で寝るという体験を実施していると聞いている。そういったところとうまく絡めて活動していくといいと思う。

委員：小学校ではそれをしている。小学生を泊めるときに高校生を指導員として入れるととてもよく働く。実際起こった場合に自分の地域の小学校へ泊まればいいが、どこに行くかは分からないので、心に余裕がある内に体験しておく、事前に分かっていると行動すると全く違う。高校生や大学生等の若い人たちに経験してもらえると非常に役に立つと思う。

(2) 資料6 市民企画講座「ワークショップデザイン」について説明。

委員：発展性のC評価について、ワークショップの手法を学び様々な場面で市民が仕組みを見つけ、役立ててもらおうということだと思う。これはサークル等に繋がらないのは当たり前ではないか。C評価は酷だと思う。主旨からして、サークル等に繋がるものではそもそもないと思う。

会長：発展性は意識向上・サークル化となっている。意識向上があれば評価してもいいのではないかな。

事務局：受講者はほぼ身内の方だった。一般の市民の方の参加が多ければ意識向上の面を考えられたが、その辺が難しいところである。

会長：講師の方が企画者だったのか。それとも企画者は別にして、講師の方は呼ばれたのか。

事務局：呼ばれた方であるが、関係者にはなる。

委員：市民企画講座の場合、運営委員は講師にはなれない。

委員：募集定員の人数も少なく、一般市民が参加しようというイメージができなかったのではないかなと思う。ワークショップデザインって何か、意味が分からないのではと思う。マニアックな感じを受けたので、発展性がC評価というのはやむを得ないと思う。一般市民の感覚からはとつき難いと思った。

委員：一般市民向けではなく、さらにスキルアップしたいという学習ニーズもある。一般市民向けと同じ評価の枠でいいのかという問題だと思う。

会長：そもそも企画側の団体が、一般市民を呼び込める企画にすべきだという論はないか。

委員：ある程度のレベル以上の方を集めてやろうという様々な切り口があると思うので、必ずしもバツではないと思うが、様々なところから人が入れればいいと思う。募集の際に、コミュニケーションアップということを全面に打ち出していくと、もう少し広がったのではないかな。ワークショップという言葉は聞き慣れないので、一般の方の受ける印象が違ったのではないかなという気がした。マッチングの問題もあると思う。

委員：活動をしている方が自分たちのニーズを明らかにするという事は、これからどんどん出てくると思う。例えば、広報するときはどうするのか、学習課題をフィルム化していくのか、発表スキルはどうやって身につけるのか、というものがどんどん高度化していくと思っている。最終的には学習社会の裾が広がっていくことになると思う。こういう講座をする際、「市民企画講座ではこんな講座をしているので、お宅のグループもどうですか」といった一般向けの広報ではない、一本釣りするような広報はされたのか。

事務局：そういうことはしていない。来年度の市民企画講座はある程度テーマを絞り、社会課題や地域課題を取り上げて、それに対して企画をしていただく方向にしていきたいと思っている。

テーマを何でも受け入れてしまうと、一つの団体に対して応援する形になり、課題自体も市民の誰もが共有できる課題であればいいが、偏りすぎている場合もあるので、そういうのはなくしたい。主旨はその団体が講座を自分たちででき、独り立ちできるようにすることである。自分たちで積極的にやろうという姿勢が初めはなかったが、後半は主体的になったことは効果があったと思うが、採用するののかの問題はクリアしていかなければいけないと思う。

委員：世の中はどんどん高度化していて、ワークショップという言葉は一般の人には馴染みがないかもしれないが、ある業界では当たり前になっている。これを採用するかをしぼりにかけるということだが、それで公民館の学習が開かれたものになっていくのか、本当にそれでいいのかという問題がある。市民が知っておかなければならないこと、市民が自立し、さらにNPOを作っていくというような形で、行政や公民館にできないことがたくさんある。そういうところを、生涯学習センターがどうパートナーをつくり出していけるのかが地域の生涯学習社会を創っていく、非常に重要なことになると思う。もう少し慎重に議論を継続したほうがいいと思う。

委員：発展性として、近々の効果を期待することに問題があると思う。生涯学習センターの学びのあり方をどうしていきたいのか。知識提供型で、えらい先生の話聞いて新しい知識を得るだけでは学びの場ではないと思う。話しを聴いた上で、自分たちがどうしたらいいかを話し合い、町づくりをしていくのが公民館や生涯学習センターの学びのあり方だと思う。このワークショップを企画した団体はそういう提案をしたかったのではないか。逆に、どうしてこのような講座を広げてくれないのかと疑問に思う。これは続けさせてあげたほうがいいと思う。公民館の学びのあり方を見直す機会として意義があったように思える。

委員：発展性についてはC評価ではかわいそうな感じがする。担当者所見では「コミュニケーションというキーワードで参加した若い世代の方がとても熱心だった」とある。今回のやや専門的な内容に共鳴する人もいて、コミュニケーションの取り方として得るものがあったということなので、それをさらに発展できる余地もあるのではないかと感じた。

委員：60%という参加者の受講率を見ると、消化不良であったと読める。先々のことはともかく、これに関しては、内容を採用する段階で留意する必要があると感じた。

委員：やり方としては問題があったのかもしれない。ただ、この内容は公民館として応援していくほうがいいと思う。

委員：この講座が活ければとてもおもしろいと思う。教育関係の人は教育関係のことばかりを考えているという状況で、それぞれの現場の人が交流して、こういう見方もあるのかということも思ってくれば楽しかったらと思う。今回はそれがうまく機能せず、受講率が60%まで落ちてしまった。教育現場に活かすワークショップというようなテーマにして、子ども達の交流をどう活性化しようかと悩んでいる先生や保護者の方をターゲットに絞ってあれば、もう少し目に見えやすい効果が表れたと思う。今回は内容が盛りだくさんであり、欲張ったように思える。

委員：この企画団体に対して、みんなに消化のいい形で提供できるようにアドバイスや案内をすれば、次回はもっとスキルアップした講座ができるのではないかと。講座をやってお終い、あまり成果がなかったと評価するのではなく、どこをどう変えればもっと広がっていくかということをもみんなで考える場を作ることが大事だと思う。

(3) 資料7 市民企画講座 東日本大震災を忘れない！「防災力UP講座」について説明。

(意見・質問)

会長：立川防災館の参加者はどのくらいか。

事務局：半数以下だったと思う。

委員：立川防災館で参加が激減したということなので、プログラムの構成で順当な日取りが得られなかったということで、評価をAからBにしたらどうか。

事務局：この部分だけでB評価にするのは酷だと思い、A評価とした。B評価に改善してもいいと思う。

委員：改善の余地が少しでもあるなら、評価をAマイナス等にしたら分かりやすいと思う。

- 委員：分析・課題のところで、「講義後に、グループワークを行い、話し合った内容を発表する形式をとっていた。」とあるが、こういう学びのあり方がとても大事だと思う。公民館の学びのあり方として大事にしてほしいので、ワークショップに力をつけていくことが必要だと改めて感じた。
- 委員：市民の方がこの内容をみたときに、地域防災の核になる方用の講座ではないかと思うので、なかなか一般の方が応募するのは難しいと思う。その結果として、昨年度と同じような方が多くなった傾向があるので、また同じような講座を来年度企画するときには、受益者の公平性にC評価がつくのではないかと感じてしまう。この評価のつけ方については、再考したほうが良いと思う。
- 事務局：受益者の公平性については、担当者の間においても考え方が分かれている。事業評価シートの問題点はたくさんあるので、担当内でも中身を変える方向で考えていきたいと思っている。こうしたら良いという案があれば出していただきたい。特に、事業内容に対する事業の必要性といった短い言葉は人によって取り方が違う。もう少し明確に、何を視点にしているのかという説明書を作る必要があると考えている。
- 委員：この評価シートは職員の方が使いやすいように、次に事業を実施するときに参考となるために作成しているものなので、職員側からどうしたいのかがあれば出していただきたい。
- 事務局：担当者には投げかけている。
- 委員：連続講座の受益者と1回限りの講演会の受益者は当然違うと思うので、そのあたりも判断基準に入れていただくといいと思う。
- 委員：受講者に企画委員の知人が多かったので受益者の公平性の評価がCになっているようだが、知人の申込みを優先的にしたので広報等で応募した方が漏れてしまったのであれば、不公平だと思うが、定員が満たない状況で、企画委員の方がみんなに聞いてほしいから知人に声をかけたのであれば、それは偏りがあるという評価にはならないと思う。
- 事務局：以前、周知の方法で周りの人にしか声をかけないということがあったと聞いている。公民館の事業として実施するものは公平性が保たれているはずだが、以前の市民企画でそれが保たれないことがあったのでこの項目を設けた経緯がある。
- 委員：そうすると、アンケート結果で広報を見て参加したというのが多ければ良いのか。
- 事務局：広報だけでなく、公平に声をかけていければいい。特定の人たちにだけ声をかけて、そこだけで簡潔するということがあると、生涯学習センターとしてやるべきではない。
- 委員：受益者が偏るのは、それだけニーズが偏っているという意味もあるとは考えられないか。特定の方しか興味がない分野の内容だったという意味での評価とも考えられる。広い範囲で、市民が興味を持っている内容ではなかったという評価もできる。知人に声がかかって参加したから受益者が偏っているのではなく、このテーマ自体にもう少し広い範囲の興味を持たれる、そういう欄として設けたのではないかと思う。
- 委員：評価の指標が難しいのであれば、生データを出していただいたほうが私たちも考えやすい。生データがあれば、それを見て評価ができる。広報が思っている人にうまく届かない、企画した関係者以外に届かない等は広報の問題なので、その講座が自分たちの利益のためだけに身内でやったのかを判断してはきついと思うので、どういう人がきたのか、どういう過程できたのかが生で見られればこの評価が妥当なのかを具体的に議論できると思う。
- 事務局：評価は担当者が行っている。資料を生涯学習センター運営協議会に出して評価をしていただくのが本来のやり方だと思うが、今後はそういうことも考えて行く必要があると思う。
- 会長：そうとは思わない。自分たちが自ら自己評価をすることは大事なことなので、必ずしも客観的な評価を部外者に求めなくてもいいと思う。
- 委員：自己評価は大事だと思う。最終的にはセンター長が最終評価をする。自分たちの中で考えていく意味はある。外側だけから評価されるので世の中がうまくいかないのであって、自分たちでどうしていききたいのか、そのために評価表を使っていただきたい。客観性がどうのではなく、よりよくしていく為に評価することを考えてほしいと思う。
- 委員：生涯学習センターの自己評価だけではなく、市民企画講座の場合は、それぞれ企画された団体の自己評価を聞いてみたい。自分たちの仲間内のスキルが上がったと評価するのか、今ま

で接したことがない様々な人に自分たちがやりたいと思っていることが伝わって良かったと思っているのか、今まで関係ない人にも来てもらえるように努力をしたのか等、企画した団体の自己評価もとても大事だと思う。

事務局：仕組みも含めて考えたいと思う。

(4) 資料8 サタデーライブ12「ハーモニカデュオ Bom×Boa によるファミリーコンサート」について説明。

(意見・質問)

委員：学習意識の向上に役立ったとあるが、ハーモニカをやってみたいと思った方の受け皿はあるのか。引き続き生涯学習センターの何らかの講座でハーモニカができるのか。(押村委員)

事務局：それはない。

委員：内容は非常に良かった。子どもも楽しめるライブであった。ファミリーコンサートだったので親子の参加者が多いと思いきや、割と高齢の方が1人で来ている姿が多かった。ただ内容としては非常に良かったと思うし、学校ではハーモニカを使わないので、子どもにとっては違う楽器に触れられたのかなと思う。

委員：「世代間交流のきっかけとなる」とあるが、お父さん、お母さん、子どもと様々な世代が来ていたと思うが、何か交流になることをされたのか。

事務局：いろんな世代の方が聴けるように曲目を工夫した。聴いているときには交流はできないので、コンサートの中で交流の時間を持つのは工夫しなければ難しい。コンサートだけで完結するのではなく、コンサート後に何かする工夫が必要である。

委員：やり方を工夫するか、この指標を変えるかのどちらかである。子ども達にただ音楽を聴かせるだけではなく、楽器をやらせたり、それをお父さんが指揮したりするようなイベント的なコンサートにするか、本当に音楽を聴かせるだけのコンサートにするかのどちらかだと思う。今回は交流とあるので、お遊びコーナーがあったほうが良かったと思う。そういうことをやらずにハーモニカの良さを聴かせたいのであれば、この指標を変えたほうが良いと思う。

事務局：親子で音楽の話題を共有するという意味では、非常に良いと思う。おじいちゃんやおばあちゃんも一緒に、3世代が参加できれば世代間交流になると思うが、知らない人同士で世代間交流をするのは、ファミリーコンサートという形では難しいと思う。

5. その他

特になし

<報告事項>

1. センター長報告

(1) 教育委員会について

12月14日に開催された。まちだ市民大学プログラム委員の委嘱について議案を提出した。委員を委嘱し、8講座のプログラムを作成していただく。報告事項は2件あり、1件は、まちだ市民大学HATSプログラム委員選任要項の制定について。プログラムに関する助言・指導をいただくためにプログラム委員を設置しているというところで、任務、選任区分、人数等を制定させていただく。12月14日から施行する。2件目は、町田市生涯学習ボランティア事業実施要綱について。来年3月から運用を開始するため、実施要綱を制定した。概要は、知識・経験をお持ちの方で地域に還元したいと思っている方と知識・技術を習得したいと希望されている方を繋げていきたいということ。事業を実施するにあたり、人材バンクへの登録資格、登録方法、利用申請、報告等を定めた実施要綱を制定させていただく。内容について、登録者は政治・宗教・営利を目的としないボランティアになる。利用者は、5名以上の団体に限る。市の事例を参考にしながら、トラブル事例の多い個人利用者は不可とした。要綱は1月1日から施行する。今後、1月11日の広報で登録者へお知らせをし、1月27日に登録者の説明会を行う。2月21日の広報で利用者へ周知、3月1日

から運用を開始する流れである。ホームページや町内会、自治会、関係機関、大学等へチラシを配布する。3月にまちだの教育・生涯学習NAVIにも掲載予定である。

(2) 市議会について

一般質問が12月4日から10日までの5日間行われた。生涯学習センターに直接関わる質問はなかった。平和教育の取り組みについて質問があり、主に学校の中でどのような平和教育を行っているのかという内容だった。生涯学習センターでは、年1回8月に平和祈念展を開催している。平和の尊さ、戦争の悲惨さを感じていただくため実施しているが、今後も続けていきたい。

(3) その他

12月9日、公民館研究大会が東村山市で開催された。「公民館は地域の絆」というテーマで、東北大学の石井山先生に被災地の現状と復興への歩みという内容の基調講演があった。その後、3つの分科会に分かれた。12月10日に個人情報審議会が開催され、ボランティアバンクの個人情報について審議された。特に質疑なく終了した。12月12日に青年学級の三者懇談会を開催した。父母会、スタッフ、職員の3者で懇談会をした。スタッフをどのように確保していくのかという大きな課題がある。以前のように学生が集まらない現状がある。また、来年度の新生をどうしたらいいかという課題もある。現在、学級生は184名。これ以上新生が増やせない現状がある。今後の予定について、12月18日に第2回教育プラン改定委員会が行われる。月1回のペースで検討委員会が開かれ、来年3月にある程度の方向性を決めていく。12月22日に第1回生涯学習推進計画検討会議、生涯学習センターの職員で作業部会を開催することになっている。1月27日にボランティアバンク登録者説明会を行う。2月12日にさがまちコンソーシアム運営委員会が開催され、来年度の予算と事業計画について話し合う予定である。相模大野駅前に、市民大学交流センターという建物ができる。12月20日に指定管理者が決定する。2月14日に都公連の館長部会が行われる。年1回研修会を行っており、「都市における公民館に求められる役割」という大きな命題がある。地方の公民館はその役割を重要視され、活発な活動がされているが、都市の公民館は弱体化している。東京都の公民館で都公連に加盟しているのは12市1町という現状である。2月17日に委員部会の研修会が行われる。話題は施設の有料化についてである。2月24日にひかり学級、3月2日に土曜学級、3月3日に公民館学級の成果発表会が行われる。青年達の活動をみていただければと思う。3月14日に市議会文教社会常任委員会が行われる。2013年度の予算の質疑ということになる。3月15日にさがみはら市民大学交流センターのオープニングイベントが開催される。3月24日に生涯学習センター一周年記念イベントを企画している。

(質問・意見)

委員：ボランティアバンクについて、団体の方は個人情報が見られるのか。どこまで情報が見られるのか。

事務局：個人は特定されないようになる。条件等の情報だけが見られる。

委員：ボランティアの資格要件という言葉に違和感がある。主旨は分かるが、ボランティアに資格があるのかという気がしてしまうので、例えば、プロボノという言い方がある。改訂の余地があるのであれば、特別な言葉を使ったほうがいいと思う。

委員：登録資格要件とすればいいのではないか。

委員：これに登録するメリットは何か。ボランティア保険はどうなるのか。そういうことも含める必要があると思う。

委員：実施要領の他に細則はあるのか。傷害保険、例えば、ボランティアにいく途中で事故にあった場合や活動中に怪我をした場合に、その傷害保険はどの程度まで出るのか。他の地域では、ボランティア登録をポイント制にして、そのポイントを使って図書券がもらえるというようなことをしていると聞いたことがある。また、遠距離でボランティアに行くときには交通費だけは出るということはあるようだった。私は知的障害者のスポーツ教室の指導員だが、障害福祉課でスポーツ障害保険に入っていて、その中で保障がでる形になっている。その辺が実施要綱だけでなく、細則で別途検討する必要があると思う。

事務局：これは実施要綱なので細かいところまでは定めていない。保険については登録の際に説明する。現在、生涯学習センターでは公民館保険に入っているが、これは建物内で事故にあった場合に限られる。市全体で入っている保険もあるので、そこに該当すれば保険の適用になる

場合もあると思う。説明会で説明させていただく。

事務局：ボランティアの言葉について、これはこの要綱に限った言い方になる。「生涯学習について専門的な知識及び経験を有する個人または団体で、教育委員会の登録を受けたもの」という意味である。

委員：言いたいことは分かるが、違和感はある。限定するのであれば、ボランティアにカッコをつけたほうがいい。

会長：限定したものが普通名詞ではまずい。

事務局：これは市の法制課と協議をして作成しているので、確認はしている。

委員：法的に問題があるかということと、これを利用する市民がどう感じるかというのは全く別の話である。そこはどうか。

委員：例えば、ボランティアにカッコをつけて提出して、それが通らないのかはやってみたほうがいいと思う。これでは一般名詞である。

委員：学習の支援をするボランティアという意味になると思うが、ボランティアと書いてあると生活の補助をして欲しい人等、そういう人まで利用者に入ってしまう気がする。一般的に使われている名称と差別化できる名称にしたほうがいいと思う。これは有償か、無償か。

事務局：無償である。

委員：受け取ってはいけないのか。

事務局：ボランティアなので、金銭の授受は発生しないというのが基本となる。生涯学習センターはマッチングさせることが主となる。例えば交通費等がかかる場合は、当事者間で相談していただく。説明会で、講師謝礼は受けとれないと説明はさせていただく。個人教室のイメージで捉えてしまわれると、この事業はできない。

委員：それは要綱には載せないのか。

事務局：これは法律的な要綱である。後は細則で定める。登録者の説明会を実施し、登録した方には研修会を行う予定である。ボランティアとはどんなことなのか、ということが大切なのかを定期的に説明会と一緒に研修会という形で実施していきたい。

委員：「生涯学習ボランティア」といった固有の名称にしないと誤解を生むと思う。他のボランティアとの違いがわからなくなる。

委員：この実施自体は反対ではない。細かいところは修正して実施されればいいと思うが、この生涯学習センター運営協議会の場で全く議論されていないものが、既に教育委員会で協議されているのはどういうことなのか。

委員：ボランティアバンクを実施することは分かっていた。傷害保険については説明会で話しがあるならいいと思うが、その場合、通院費や入院費がいくら出るのかといったことが必ずあると思う。ボランティアとして登録する段階では、非常に大事なことになってくると思う。

委員：登録説明会でどういう説明をするのかを事前に知ることはできるのか。

事務局：説明する内容は報告させていただく。

委員：生涯学習の定義について、応募される方に分かりやすく説明していただけるのか。

事務局：わかりやすい工夫をしたいと思う。生涯学習センターでは様々な活動がされているが、それだけに留まっている。地域で要望があればマッチングさせていきたいと思っている。広報等で周知をするが、初めは登録が少ないことが想定されているので、こちらからも声かけをしてアプローチしていこうと思っている。

2. 東京都公民館連絡協議会の活動について

(役員会について)

委員：都公連には26市のうち12市しか加盟しておらず、今後の都公連の役割が達成しにくい状況にある。対象メンバーをもっと拡大するために、社会教育と生涯学習を統合する形で社会教育施設というのを一つのベースにかかえて、新しいシステムを作ったらどうかというアイデアがある。それを称して、社会教育生涯学習施設連絡協議会というのを来年4月以降に作ろうではないかという話がある。今後、どう進展していくかはなんとも言えない。

(委員部会について)

委員：明日、国立公民館で第9回委員部会が行われる。2月17日に委員部会主催の第3回研修会が開催される。テーマは「厳しい財政状況の中での公民館運営」。施設の有料化や職員配置の問題、民営化問題等、最近の公民館が抱えている問題について話しをする。シンポジウム形式で、コーディネーターは首都大学の荒井先生。パネラーとして東村山市、町田市、国立市の元公運審委員長の方が事例報告をする。有料化の是非に焦点をあてるのではなく、それぞれの自治体の状況・立場をお互いに理解し合い、その上で公民館運営を一緒に考える場になりたいという主旨になる。委員の方も参加いただければと思う。

3. その他

会長：生涯学習NAVI2・3月号の執筆について、小川委員にお願いしたいと思う。

委員：来年度の生涯学習センター運営協議会の開催日時について、何曜日の何時というように、日程を決めたらどうか。

事務局：いい時間帯があればいいが、特定の日にすると特定の方だけが出られないというのが現状である。

次回の生涯学習センター運営協議会開催日について

1月29日(火) 14時から16時 文学館第6会議室